第４回「高村・宮中塾」レジメ

日　時：2023 年６月 25 日(日)　10:00～12:00
場　所：広島県労学協事務所＋Web(816 6029 1088)

テーマⅠ　真理とはなにか

1) 科学的社会主義の真理観

○唯物論では、真理とは、客観的存在と一致する認識。
○しかし真理は、一挙に実現できるものではなく、歴史的に相対的真理から絶対的真理へと無限に前進する。
○また科学的社会主義は変革の立場に立つので、真理を現在についてのみならず、未来の「真理をかかげてたたかう」（第 20 回党大会）として、未来の真理をも認めている。
○科学的社会主義の政党が、いかにして未来の真理をつかむのかは明らかにされていないが、それを明らかにしたのが、ヘーゲルである。

2) ヘーゲルの真理観

○「普通われわれは、対象と表象との一致を真理と呼んでいる」（小論理学上 P124)が、それは単なる「正しさ」(同下 P145)に過ぎない。
○ヘーゲルは哲学的な意味の真理とは、「概念(真にあるべき姿―高村)と実在との真の一致」（同）として、変革の立場から未来の真理を論じている。
○正確には、唯物論的真理とは認識の問題であり、未来の真理は「概念と一致する認識」というべき。
○未来の真理としての「概念」は、客観的事物のもつ矛盾を揚棄してえられるという「発展法則」によって手にしうる唯物論的真理。

テーマⅡ　「事実の真理」と「当為の真理」

1) 真理は「事実の真理」をへて「当為の真理」に至る

○人間は、まず客観的存在に関する「事実の真理」を認識し、ついで「事実の真理」の矛盾を揚棄して「概念」を把握することで、未来の真理としての「当為の真理」を認識する。
○人間の認識は真理と誤謬との統一であり、「事実の真理」も「当為の真理」も、始めは「ただこうした誤謬からのみあらわれ出る」(小論理学下 P207)、相対的真理である。
○相対的真理を絶対的真理に前進させるのは、実践による真理性を検証である。。
○すなわち、「事実の真理」においては実験・実践により、「当為の真理」においては世論の対応という実践をみながら、絶対的真理に無限に接近する。

2) 「当為の真理」は必ず勝利する

○「当為の真理」は、絶対的真理の粒を含んでいるから、相対的ではあっても、真理として単一である。
○「当為の真理」は、真理として一度人々の心をとらえるならば、真理のもつ普遍的力によって決してはなれることはない。
○よって「当為の真理」は、真理のもつ普遍性により、ジグザグはあっても、少数者の真理から多数者への真理へと必然的に現実性に転化し、最後は必ず勝利する。

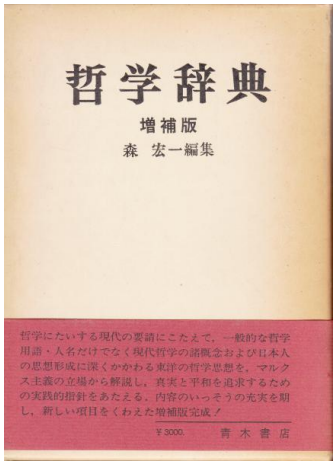
参考資料①
～「真理」に関して～

弁証法的唯物論は、客観的な事物の認識は可能だとし、人間がもつ観念がそれと一致している場合に、客観的真理という。（中略）

人間が事実上獲得する真理は相対的なものであり、客観をあますことなく完全にとらえる絶対的真理というものは、この相対的な真理のつみかさねによってえられていく、発展しながらそれに接近していくのである。しかし相対的真理は完全・絶対的でなくても、客観のなんらかの側面をとらえているから、客観的真理の資格をもつ。

このさい、客観を反映する認識が客観と一致しているかどうか、真理であるかどうかを、究極的に確かめるのは、実践による検証である。

（「哲学辞典」森宏一編　1981 年増補版の項目「真理」より引用）



青木書店
ネット最安値 900 円

＊＊＊

認識論の中心的な問題で、唯物論では、認識の対象たる客観的実在と一致する観念・判断を真理という。弁証法的唯物論は、反映としての認識を、たんに鏡に物がうつるようなものではなく、事物にたいする人間の働きかけ、すなわち実践によって得られ、実践の発展とともに深められていくとみなす。また、認識が客観的現実を正しく反映しているかどうかは実践によって検証される。

（「社会科学総合辞典」1992 年　項目「真理」より引用）

新日本出版社
ネット最安値1,826円

われわれの確信は、真理にたいする確信でありますが、その真理は客観的に存在するものであり、その意味で客観的真理、絶対的真理というものの存在をわれわれは認めております。真理への接近の可能性は無限であるけれども、その客観的真理、絶対的真理への接近は、人類の認識の法則として、一挙にすべてのことが認識されるのではなくして、その接近の程度は歴史的、社会的に限界があるということであります。こうした認識上の観点を自覚することは、(中略)われわれの確信は、独断論やたんなる信仰ではない、科学に依拠している、ということを保障するものであります。

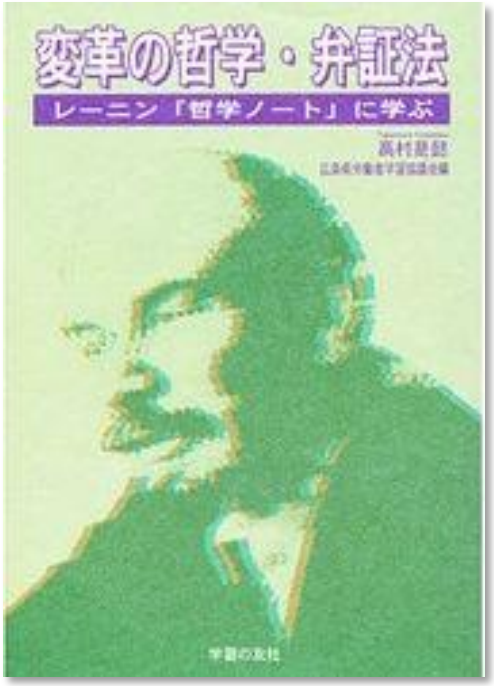
(「前衛」第11回党大会特集　P.97)

＊＊＊

日本共産党の第二十回党大会の報告で「歴史にたいする前衛党の責任とは何か。それは、そのときどきの歴史が提起した諸問題に正面からたちむかい、社会進歩の促進のために、真理をかかげてたたかうことであります」(「前衛」第20回党大会特集　P.41)と述べています。

歴史が提起した諸問題の真理とは何かというと、その諸問題の当為の真理を問題にしているわけです。つまり、当面の政治的課題に対してどう対処すべきか、どうあるべきかという当為を問題にしているわけです。

(「変革の哲学・弁証法」高村是懿著　P.329～330)



「変革の哲学・弁証法～レーニン「哲学ノート」に学ぶ」
(2001年10月出版　一粒の麦社　定価3,000円)

参考資料②
～　ヘーゲルの真理観　～

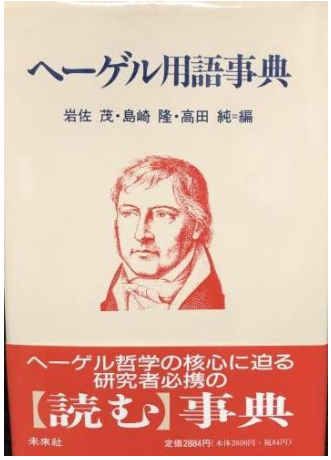
一般に、思考の働きは事実や真理を捉えるところにある。ふつうの真理とは、認識が対象と一致することと考えられる。（中略）（この真理観は一般に「真理対応説」とよばれる）

ところがヘーゲルの真理観はより広いものであり、まずなんらかの意味で真に客観的に存在するものを意味し、さらに認識する主体と対象とを包摂する全体的なものを意味する。（中略）

真理とはなにかを考えるさい、ヘーゲルは認識における《正しさ(正当性)》と「真理」を明確に区別する。「正しさ」とはさきの「真理対応説」の真理観を意味する。（中略）

ヘーゲルによれば、真理とは、より深い意味では、概念(=理想の姿)と実在・対象(=現実の姿)の合致のことである。

（「ヘーゲル用語辞典」岩佐茂ほか編　項目「真理―誤謬」より引用）



＊＊

真理と言えば、人はまず第一に、或るものがどういう風にあるかを知ることだと思っている。しかしこれは単に意識との関係における真理にすぎず、言いかえれば、形式的な真理、単なる正しさにすぎない。より深い意味における真理は、しかし、客観が概念と同一であることである。例えば真の国家、真の芸術作品と言われる場合、そこで問題になっているのは、こうしたより深い意味の真理である。それらは、それらがあるべきものである場合、すなわち、それらの実在がそれらの概念に一致している場合、真である。（「小論理学」下 P. 210）

＊＊

ヘーゲルは、また真にあるべき姿の認識にとどまらず、その実現(客観化)をもって真理ととらえ、概念と客観との統一である「理念は真理である」といっています。しかし、真理を認識の問題から客観の問題にまで広げることは、「真理とは何か」の問題を曖昧にすることになると思います。したがって唯物論的真理とは、あくまで認識の問題であるとしながら、認識と客観の一致には「現にある姿の認識」と「真にあるべき姿の認識」の二つの側面があり、ヘーゲルのいう「理念」は、真理そのものではなく、後者の意味における「真理の実現」(真理態)としてとらえればいいのではないかと思います。

（「弁証法とは何か」高村是懿著　P. 411～412）

参考資料③
～　相対的真理と絶対的真理　～

理念自身もその過程においてこうした錯覚を作り出し、自己に他者を対立させる。そして理念の行為はこうした錯覚を揚棄することにある。真理はただこうした誤謬からのみあらわれ出るのであって、この点に誤謬および有限性との和解がある。

（「小論理学」下 P. 207～208）

＊＊

思考の至上性は、きわめて非至上的に思考する人間たちの系列をつうじて実現され、また真理たることの無条件の主張権をもつ認識は、相対的誤謬の系列をつうじて実現されるのである。このどちらも、人類の生命の無限の持続をつうじてでなければ、完全に実現されることはできない。

（「反デューリング論」全集⑳P. 89）

＊＊

人間の思惟はその本性上、相対的真理の総和から構成される絶対的真理を、われわれにあたえることができるし、またあたえている。科学のおのおのの発展段階は、絶対的真理というこの総和に新しい粒をつけくわえる。（中略）

弁証法的唯物論にとっては相対的真理と絶対的真理のあいだにこえがたい境界は存在しない。

（「唯物論と経験批判論」レーニン全集⑭P. 156～158）

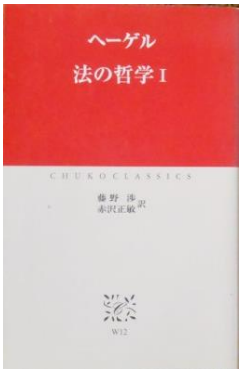
＊＊

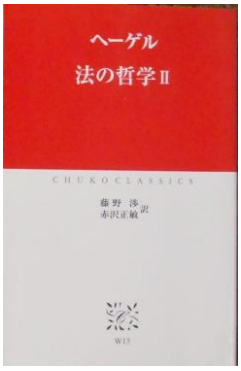
世論のなかでは、真理と限りない誤謬とがきわめて直接に結合しているから、真理にせよ誤謬にせよ、ほんとうに本気で言われているのではない。何が本気で言われているのかが見分けにくいと思われるのは当然である。（中略）

しかし実体的なものこそ世論の内に含まれている核心なのであるから、これだけはほんとうに本気で言われているのである。だがこの実体的なものは世論からは認識されえない。まさにそれが実体的なものであるがゆえに、それはただそれ自身からのみ、そしてそれ自身としてのみ、認識されうるのである。（P. 389）

世論のなかには一切の虚偽と真実が含まれているが、そのなかの真実のものを見つけるのが偉人の仕事である。時代が意志しているものを、言い表し、時代に告げ、そして成就する者、これが時代の偉人である。彼は時代の心髄にして本質であるところのものを行って、時代を実現する。ここかしこで耳にするような世論の軽蔑すべきことを心得ていない者は、決して大事をなしとげることはないであろう。（P. 392）

（以上、「法の哲学Ⅱ」中公クラッシクスから引用）





参考資料④
～　真理と実践について　～

フォイエルバッハに関する第二テーゼ

人間の思考に対象的な真理が得られるかどうかという問題は―理論の問題ではなく、実践的な問題である。実践において、人間は真理を、すなわち、彼の思考の現実性と力、此岸性を証明しなければならない。思考が現実的であるか、それとも非現実的であるか、にかんする論争は―この思考が実践から遊離していると―純粋にスコラ的な問題である。

（「新訳・ドイツイデオロギー」服部文男訳　P. 110）

フォイエルバッハに関する第十一テーゼ

哲学者たちは、世界をさまざまに解釈しただけである。肝要なのは、世界を変えることである。

（同上 P. 113）

＊＊＊

党の大会や中央委員会の決定は、第一に、人類の科学的成果を総括した科学的社会主義の立場に立脚したものであり、そのときどきの世界と日本の現状を、事実にそくして全面的に分析したものです。そこにもりこまれた内容は、せまい意味の党派的利益にとらわれない客観的真理のそのときどきの探究であり、それゆえに、それは、つねにもっとも広範な国民の利益を代表するものです。

第二に、それは、真理の検証は実践であるという見地にたっています。世界と日本の現代の歴史、そこでのさまざまな実践という客観的な事実をしっかりとみすえ、科学的な分析にもとづいてつくりあげられる決定は、実践のなかでより豊かにされ、発展させられていくものです。

第三に、それは、集団的英知の結晶であるということです。わが党の大会や中央委員会の決定は、党指導部での集団的検討をへて立案され、大会決定の場合は、全党の討議と全党から選出された代議員の討議によって、それぞれ決定されるものです。集団的英知の結晶というこの性格のなかにも、真理を探究する姿勢がつらぬかれているのです。

（「前衛」18 回党大会特集　P. 63）

＊＊＊

日本共産党への批判で、中央委員会総会のコミュニケで全員一致で採択と発表すると、これは一枚岩の党だ、紋きり型だと、冷笑するような揶揄するような傾向が少なくありません。しかし、これはわが党中央が並び大名であるからではないんです。

日本共産党が科学的社会主義を理論的基礎とするという一致があるかぎり、基本的な認識の基礎、方法論は一致しているのですから、党の方針決定にさいして問題をよく検討すれば、一致するのはきわめて自然なのであります。

（中略）

第八回党大会で綱領が全員一致で採択され、また全党的に確認されたことは、社会発展の法則の問題でも客観的な認識は可能だという、弁証法的唯物論の認識論にもとづいて粘りづよい討論をおこなった結果であります。そのことをみないで、全員一致で採択すること自体がなにか民主的な事態でないかのようにみることは根本的には科学的社会主義への、とくにその哲学への無知にもとづくものだと批判できるのであります。

（中略）

科学的社会主義は、客観的真理の認識の一致を可能だして追求するものであり、それを理論的基礎とする党は、一国では一つであるべきです。（中略）

問題は、誤りが多い、世界にも誤りがみちている、だから世界はどうなるかわからない、闇だというような立場にたつかどうかです。真理をまもる勢力、真理を認識しようとする勢力が多数になり、結局、誤った見解に固執する勢力よりつよくなる、こういう自覚と確信が必要です。人類の運命はこの正しい認識をもつ勢力が、誤った見地に固執する勢力よりかならず多数になる、この展望こそ人類のほんとうの未来があるのであります。まさに科学的社会主義の哲学をよくさとって自覚して、そして動揺しないということが大事なのであります。

（「前衛」第 19 回党大会特集　P. 27～28）

討論　メモ用紙

討論テーマⅠ　真理とはなにか　10:40～11:00

〈メモ〉

討論テーマⅡ　「事実の真理」と「当為の真理」　11:40～12:00

〈メモ〉

230528 第３回「高村・宮中塾」～感想文集

5/28 労学協事務所にて第３回「高村・宮中塾」を開催し、会場に６名が参加しました。参加者からの感想を紹介します。

学習会に参加しての感想

○今日の話は、とても面白かった。お二人のヘーゲル哲学に行きついた経過を興味深く聞きました。講師の「なぜ学問を」みたいな話は、いつ聞いても触発させられます。高村さんが 50 年学んで「やっと分かってくる」との話には、私も学習を続けると、いつかは分かってくるのかなと希望が持てました。

○ヘーゲル哲学が観念論を装った「革命の哲学」、時代背景をつかむことで、そのことが理解されるようになればと思います。他から言われる「ヘーゲルは観念論者」ということが独り歩きしていることに縛られているのは残念ですね。

○今日の講座での目的が全面的に達成されたものになったと思います。よく理解できるように参考資料が準備されていて、素晴らしい講座でした。

○ヘーゲル哲学は「観念論敵装いをもった唯物論」だということは分かりました。

疑問に思った点・深めたいと思った点

○高村さんが鰺坂先生に「社会主義は現実に存在しないにも関わらず、社会主義とは何かを論じるのは観念論ではないか」と言われたことがビックリしました。ヘーゲル哲学について評価も含めて、もっと党員は学んだらいいのではないかと感じました。

○理念と概念のちがい。

理解できた点・面白いと感じた所

○権力側の理解。変革の立場に国民が立つのを恐れているのは、今も昔も同じ。今でもヘーゲルを観念論者と言い切る人たちは、権力側の意思を広めている役割を果たしていると感じました。

○哲学を学ぶのは「社会・現実を変革するため」、ここを大切にしていきたいと改めて思いました。

○カントまでは矛盾を捨て置いていたが、ヘーゲルは矛盾を発展の原動力にした。

自由記入

○ヘーゲルを「唯物論者」だと誰も言ってない時に、高村さんが本を出版され「おっかなびっくり」だったとの思い。それでも真理を伝えようとされたことに尊敬します。

○もう一度、復習しないと、と思いました。

5/28 第３回高村・宮中塾　参加者６名

次回のお知らせ

日時：　2023 年 7 月 23 日(日)　10:00～12:00
場所：　広島県労学協事務所＋Web
内容：　①ヘーゲルの自由論
　　②自由論の発展